

クロハナムグリについて*

高橋 寿郎

クロハナムグリ *Glycyphana fulvitemma* Motschulsky は体長 11~14mm. 黒色で背面は光沢にふいが腹面では強い。上翅の中央に淡黄色の帯状紋があり、丁度紋付を着た容姿端麗と言った表現がピッタリするようなコガネムシである。コデマリとかガマズミの様な白い花に飛来している姿はほんとうにビックリする程美しい。

このコガネムシは日本では各地に広く分布していて一度に多くを見ることは割合少ないようであるが、まず日本産コガネムシの中の普通種の 1 つであることは間違いなさそうである。最近出版された原色日本甲虫図鑑(Ⅲ)の中で八重山諸島産のものは別亜種に区別されるように発表してあったが、少なくとも斑紋だけを見たら神戸市内でも採集出来ているものである。

そこでこの種の斑紋とか分布に就いてを中心に手許にある標本、資料とかで雑文を書いて見た。

本種が初めて記載されたのは Motschulsky によって 1860 年 Schrenck のアムール川流域での極東探検調査報告書の中においてのようである (in Schrenck's Reise Amurlander, p.135, 1860)。この原記載を直接見ていないので原産地をどの様にされているのか良くわからない。所謂アムール川(黒龍江)については筆者も忘れ得ぬ思い出がある。1945年(昭和20年)満州国四平街(現中国吉林省)にて終戦をむかえ、武装解除をされシベリア(実際にはソ連カザク共和国)での抑留強制労働が待っているとも知らずアムール川畔、ブラゴベシチェンスクの対岸愛輝(アイホイ・黒河)の川原で天幕をはって2泊程したこと。船に乗りアムール川を渡ったが、ブラゴベシチェンスクの街はいやに道路の広い煉瓦造りの建物が並んで静かだったことと、丁度10月始めであったが粉雪が舞って大変寒かった思い出が今でも強烈に残っている。このアムール川流域の何処で採集されたのであろうか所謂の広大なシベリアの地の中の何処かであろうと思う(1937年に出版された第一次満蒙学術調査研究団報告, V11-II, part. VII, Artic. 55の中には本種は出てこない)。

1875年 C. O. Waterhouse は有名な G. Lewis が主として南部日本で採集して帰国したものに基いて "On the Lamellicorn Coleoptera of Japan" と題する論文を発表した (Trans. Ent. Soc. London Part. 1: 71~116, pl. 3)。この中で p.114 にこの種が出てくる。本種が日本から記録されたのは恐らくこの論文によるものが始めてではないかと考える。たゞ

* 兵庫県甲虫相資料. 153

きべりはむし Vol.13, No.1, p.1-9, 1985

残念なことに単に種名と *Hab. Mongolia ; Japan* となっているだけで何一つ解説が無い。それとこの種の前に *Glycyphana Sieboldi, Snellen v. Voll. Hab. Japan* と独立種としてしかも解説無しの種名が出ている。

1879年 G. Lewis は London で " *Catalogue of Coleoptera from the Japanese Archipelago* " を発行した。この p. 14 に №1015, *Sieboldi*, №1016 に本種が出ている。

1886年 H. J. Kolbe は " *Beitrage zur Kenntniss der Coleopteren—Fauna Koreas* " なる論文を発表した (*Arch. f. Naturg.* 52: 139—240)。この中で p. 196 の所に本種が収録されていて産地として Amurgebiet (アムール川流域), Daurien, Mongolei, Korea and Japan とのみあってこゝでもこの種に就いての解説の様なものも全く無い。

1887年には Schönfeldt, H. V. の " *Catalog der Coleopteren von Japan mit Angabe der bezuglichen Beschreibungen und der sicher bekannten Fundorte* " が発表された (*Jahrb. d. nass. Ver. f. Naturkunde* 40: 31—224)。この中に p. 110 に本種並びに *Sieboldi* で独立種として取扱われ共に産地は Japan とのみになっている (この論文では産地名の記されているものも多くある。従来の文献を集大成した様なものではあるが一)。

同じ年 (1887) G. Lewis は " *On the Cetoniidae of Japan, with Notes of new Species, Synonymy and Localities* " なる論文を発表した (*Ann. Mag. Nat. Hist.*, XIX(6): 196—202)。その中で p. 199 に本種を記録し *Sieboldi* と同一種と取扱っている。" 普通に見出され特に神戸と日光に多い " と書いてある。

1894年 松村松年博士が動物学雑誌に (第6巻, 第65号) の上で " *北海道鞘翅類 (続き)* " なる報文を発表しておられる (p. 84—97) がその中で p. 90 に本種が学名をもって記録されている。恐らくこの記録が日本人によって始めて日本から本種が記録されたものであろうと思われる。尤も翌1895年 同博士が同じ動物学雑誌上に (第7巻, 第86号, p. 51—65) 発表になられた " *Catalogue of Coleoptera collected in Hokkaido* " の中には本種が出てこない。北海道の記録はこの様には日本では一番古いのにもかゝらず北海道を分布にとりあげた文献は永い間現れなかった。このあたり大変不思議である。1939年 西島 浩氏は札幌から本種を記録, 北海道を新分布記録として報じておられるが (*日本の甲虫* Vol. 3, №1, p. 16) 氏は松村博士の記録を見ておられなかったのではないかと考える。

1898年には E. Reitter は *Best.—Tab. Melol. II, Theil. XXXVIII, Heft. p. 44* に *Glycetonina* 属の種として東シベリア, 日本を産地に記載されている。今迄のところ原記載はどうか見ていないのでわからないがこの Reitter の論文迄種名は出て来るがこの種についての形態的記載と言うのは全く見られない。この Reitter はよって始めて記載がされたように思われる。

大上宇一氏は 1901年に " *播磨産金亀子科* " と言う報文を発表された (*動物学雑誌* 13巻, 156

号 p.321-323)。その中でクロハナムグリ *Glycyphana* sp.としてこの種を記録しておられるのである。当時同定に利用出来る文献と言ってほとんど無い状況下で記録されているのは敬服の致りである。この報文が日本人によって本種を本州から記録された一番始めてのものになると考える。その後大上氏は1907年にも「播磨産甲虫類」と題する報文で（昆虫世界, 11巻, 116号, p.159), 106クロハナムグリ *Glycyphana fulvistemma*と学名をつけて記録されLewisの1879年のカタログを参考文献としていることを書いておりLewisのカタログ番号1016も同時に付けておられる。

日本人による日本で始めての本種の図説と言うことになるかと松村松年博士の「日本千虫図解, 第三」(p.188, pl.47, f.16, 1906)と言うことになるかと思う。

1921年に出版されたS. SchenklingのW. Junk Coleop. Cat. Pars.72の中では(p.273)本種の分布はDaurien, Monglei, Japan, KoreaとなりSieboldiはJapanを産地に変種扱にしている。

1923年は新島善直, 木下栄次郎両博士による名著「こがねむしに関する研究報告(第二), 我国産スルこがねむし及其分布」(北海道帝国大学農学部演習林研究報告, Vol.2, No2)が世に出た。この中でp.180-181, Taf.V, fig.10に本種を図説された。所謂本格的な分類論文である。産地はMongolia, Daurien, Japan, Koreaと従来の外国文献のものをそのまま掲げ新に京都, 東京を加えている。Sieboldiは変種に扱われている。

1924年岡本半次郎博士は「The Insect Fauna of Quelpart Island」なる論文を発表された(Bull. Agr. Exp. St. Gov. Chosen Vol.1, No2)。その中では済州島からは1頭のみ採集されこの島では稀な種のようなこともある。分布は東シベリア, 北支那, 朝鮮, 日本(本州)となっている。

1930年には横山桐郎博士の「日本の甲虫」の中で原色図説がされた(pl.12, f.3, p.96)。分布は本州, 朝鮮, 蒙古となっている。

1933年神谷一男・安立綱光両氏の「原色甲虫図譜」(pl.54, f.4), 平山修次郎氏の「原色千種昆虫図譜」(pl.65, f.5), 加藤正世博士の「分類原色日本昆虫図鑑 第八輯」(pl.11, f.11, 12)に夫々本種を原色図説された。それまで日本での分布は本州のみになっていたが加藤博士が始めて本州, 四国, 九州を分布に掲げ var. sieboldiを台湾に産するとして原色にて図説をされた。尤も1935年加藤博士の報文「主要金龜子科の分類(4)」の中では(昆虫界, 3巻, 18/19号, p.345)分布を本州, 朝鮮とのみにしている。

1935年高木茂氏は本種の淡黄色の帯状紋の無くなっているものが名古屋瑞穂町の樹液に来ていたとして ab. nagoyanaとして記載された(昆虫世界, 40巻, 467号, P.256-257)。

1939年の三輪勇四郎, 中条道夫博士の「日本産鞘翅目録Pars.5, 金龜子科」でも日本は本州

のみを分布にされている (p.91), *ab.nagoyana*, var. *sieboldi* は入っている。

1940年の平山修次郎氏の原色甲虫図譜 (p1.5, f.5, p.8) は同一著者の1933年に出版されたものがそのまま収録されている (図示されたのは東京井之頭産のものである)。

この年代を代表する次の地方誌的文献の中にはそれぞれ本種が収録されている。

1937年渡辺福寿氏 "森林動物相調査報告, 第一輯, 金龜子科" (p.90-91, pl.23, f.47), 1938年福井県博物学会 "原色福井県昆虫図譜" (p1.8, f.28), 同じく1938年加藤正世博士 "武蔵野昆虫誌" (p.140)。竹内誠一氏 "岩手県甲虫誌, 第一巻" (p.117)。分布は加藤博士のものゝみ本州, 四国, 九州となっていて他は本州のみを分布地としている。

終戦後いち早く出版された(1950)北隆館の "日本昆虫図鑑, 改訂版" にはどうしたわけか本種が収録されていない。伊賀正汎氏が担当された "原色日本昆虫図鑑, 甲虫編" (保育社, p1.32, f.70, p.103, 1955) には勿論図説 (大阪府池田産) され日本での分布を本州, 四国, 九州とされている。

1960年野村 鎮氏は "日本産コガネムシ類目録" を発表された (Tōhō Gakuho No.10, p.39-79)。この中で *sieboldi*, *nagoyanus* 共にこの種に統一されて取扱われ日本での分布に北海道, 対馬を加えられた。このことは1963年出版された "原色昆虫大図鑑, 第2巻 (甲虫篇)" (p1.69, f.2, p.137) の中でもそのまま踏襲されている。

本種はシベリアあたりにはいる種なので (筆者は玉貫光一氏からシベリア産と言う1♂を領けて頂いている), 千島あたりにはいないだろうかと考えたりするが桑山 覚博士の "南千島昆虫誌" (1967) 及び G. O. Kryvolutskaja "Entomofauna of the Kuril Islands" (1973) の中には見ることが出来なかった。

朝鮮での産出状況は C. W. Kim "Distribution Atlas of Insects of Korea" (1978, p1.38, sc56, p.388) の中で図示されているが分布域はそれ程広いように見られないが, 5, 6月の出現が一番多いとある (戦前京城に住んでおられた野田と言う方と何回か標本の交換をしたことがある。その交換で逍遙山産と言う1♂1♀を送って頂いて現在でもその標本を所有している)。

その後日本での甲虫に就いての図鑑は啓蒙的なものは出版されているが本格的な図鑑と言うものはほとんど出版されていない。僅に1975年 "学研中高生図鑑, 昆虫II, 甲虫" がある位で1985年になって "原色日本甲虫図鑑, II" が久方振りの図鑑と言うことになる (1983年の岡島秀治, 海野和男両氏の "日本の甲虫", 1984年の黒沢良彦, 渡辺泰明両氏の "野外ハンドブック・12, 甲虫" にはそれぞれきれいな本種の原色図説がされている)。

これ程日本では分布も広いし, 普通種なのでその生活史も良くわかっているのだろうと思ったがどうも筆者の調べ方が不充分なのか日本での本種の幼期の図説も見られなかったし生態についての報告も見ることが出来なかった。案外とその生活史は不明の点が多くあるのではないだろうか。

海外では1952年にS. N. Medvedevは " Larve of the Lamellicornia (Col.) of U. S. S. R. " の中で幼虫を図説しておられる (p.173-174, figs.370-373)。さらに1964年同一著者による " Fauna U. S. S. R. Tom. X, №5 " の中では詳しい記載もされているし幼虫の図もついている (p.317-320, f.742-750)。

1984年にはZhang Zhi-liによる " Economic Insect Fauna of China. Fasc.28. Coleoptera: Larvae of Scarabaeoidea " には幼虫が図説されている (p.29, pl. VII, fig. 77-79)。それによると南京付近では1年1代で成虫は3月下旬頃出現し4月下旬から5月中旬成虫をもっとも多く見られると。

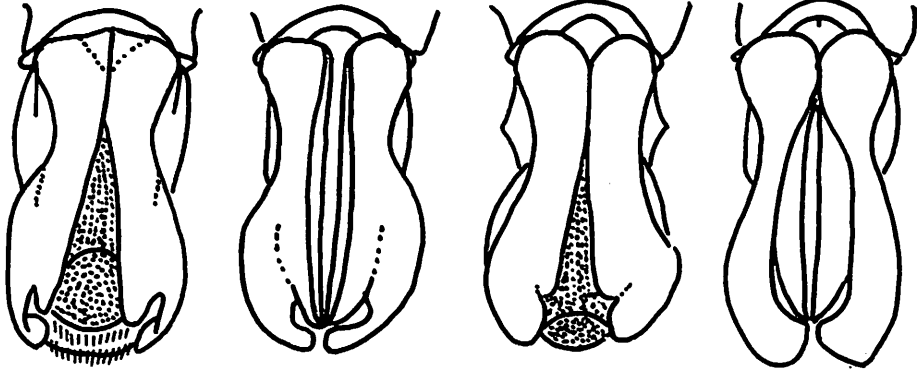
林博士も成虫は5月頃から出現し花にもぐる。幼虫はもろくなった朽ち木や腐葉土中でそれらの腐植物を食べて育つ。1~2年で成虫となると解説されている(1975)。

兵庫県産での採集時期でも5,6月が圧倒的に多く、7,8月と大変少なく9月の採集例も僅かならある。

普通種なるが故にその生活史を調べて見ようと言う人が出てこないのかもしれない。

クロハナムグリの淡黄色紋は色々の個体を見してみると割合変化があるようで既に野村氏がのべておられるように、上翅の中央に淡黄色の帯状紋があるほか数小紋が点在し、前胸背にも中央の細い縦紋とその両側の4小紋および側縁に沿った縦条は淡黄色であるが時に消失すると言う状況である(兵庫県産 30♂♂ 22♀♀所有標本を検しての結果)(小林裕和氏も八重山諸島産の個体では一般に多数の白斑を有する型のものが多いようであるとのべておられる、1974)。特に上翅の末端縁にそって淡黄色紋を可成り太く有した個体も神戸で採集出来ているし、加藤博士の図鑑に var. sieboldi として図説された様な斑紋を有するもの、" 原色日本甲虫図鑑(II) " で図説された様な斑紋のもの(特に前胸背に淡黄色が多く出ているもの)は神戸市内でも採集されている。台湾からの採集品も10♂1♀♀を所有しているが一般的なもの(どちらかと言えば黒っぽいものが多い)に混じて var. sieboldi と言われている様なものも3♂ある。

八重山諸島産と言うものの標本を所有していないので中胸突起中央に深い横溝があると言う特徴は良くわからないが台湾産の淡黄色紋の多い個体の中胸突起は横溝がはっきりしているが神戸市山の街で採集出来ている淡黄色紋の多い1♂の中胸突起には横溝が認められる(やゝ太い凹み)。♂の交尾器についても若干変化がある様である(図参照)。従って野村氏が扱われたように var. sieboldi も ab. nagoyanus(筆者が1984年にこの異常型になると思われるとした標本も良く見るとどうも該当しないようである)もこの種の斑紋の変化の範疇に入るものと考え方が良いのかもしれない(可成りよごれた個体も多く採集され真っ黒に近いようなものも採集出来る)。たゞソ連シベリア産のもの(1♂, 21-VI-1962)は日本産と比べて大変小さく、朝鮮産(逍遙山1♂1♀♀, 20-VI-1939)も細目で体長も日本産より短い。台湾産は日本のものと同じ様であるが中国大陸産



Medvedev, 1964

Kobe Karasuhara
16-VI-1982

Kobe Yamanomachi
28-V-1950

Formosa
10-VI-1984

クロハナムグリ ♂ 交尾器 4 態

あたりはどんなものであろうか（筆者丸2ヶ年の間中国大陸 — 主として揚子江沿いであるが — にいたが本種にお目にかゝった記憶は無い）。

最後に貧弱な筆者の所有文献で本種の日本における記録はどの様にあるのかまとめて見た。本種は同定に間違ふことはほとんど無いと考えられるが（参照文献では1つだけ学名が間違っていたように思う）、普通種のためか筆者の所有文献が貧弱の故か案外と少ない様に思われた。また全く記録の無い県があるのはひとえに筆者の文献の蒐集不足の故だと考えられる。たゞ何処の記録地でも多いと記録されたのは1, 2の地域を除いてなく、ほとんどの所で個体数は少ないようだ記録されている。

クロハナムグリの文献にあらわれた記録。

北海道（松村，1894）；札幌（西島，1939）；札幌，定山溪（逸見文次 1941，昆虫界 9（88）：391）；札幌，神居古潭（井内孝弥，1940 昆虫界 8（74）：277）。

青森県十和田村葛（渡辺，1937）。

岩手県高洞山，繋温泉，御明神村（竹内，1938）。

宮城県鬼首村（渡辺，1937）。

山形県飯豊連峰ヌクミ平（白畑孝太郎，黒沢良彦，1970 飯豊連峰：205）。

新潟県中頸城郡黒川（中根猛彦，馬場金太郎，1960 長岡科学博物館報：9）；胎内川上流（馬場金太郎，1972 飯豊山塊，胎内溪谷の生物：212）；新潟県（新潟県昆虫図鑑，下，1982：60）。

茨城県(日置正義, 1973 瑠璃星 1:3).

群馬県新屋村天引, 小幡町(小坂橋秀治, 1935 昆虫界 3(18/19):382).

埼玉県飯盛峠, 浦和市田島(斉藤良夫, 1978 埼玉県動物誌:227).

東京都武蔵野(加藤, 1938):井之頭(平山, 1933, 1940);渋谷, 世田谷区(久次米正雄, 1936 昆虫界 4(34):873).

神奈川県小田原, 箱根, 丹沢, 札掛(中村光, 1964 丹沢大山学術調査報告書:363. 平野幸彦, 1981 神奈川県昆虫調査報告:295).

長野県野尻湖畔(山田勇飛, 1943 昆虫界, 11(113):347);中・南信(降旗剛寛, 1979 長野県昆虫図鑑下:129).

富山県立山, 称名峡, 砺・井栗谷(北村征三郎, 1982 *Amica* 26:108).

愛知県各地, 北設楽山岳県立公園一帯, 裏谷(穂積俊文, 1958 佳香蝶 10(34):9;1968, 同 20(77):117);石巻山, 官路山, 鳳来寺山(松野更一, 松野光恭, 1975 三河の昆虫(12/13):49);南設楽郡鳳来町来寺山(大平仁夫, 1979 鳳来町自然と文化:75, 76).

岐阜県岐阜市(田内雄, 1940 昆虫界 8(73):168).

福井県福井市, 県下一円(井崎市佐衛門, 1935 昆虫界 3(13):19;原色福井県昆虫図譜, 1938, p1.8, f.28);鬼ヶ谷, 鳩が湯(井崎市佐衛門, 1959 福井県博物同好会々報 6:22);金草山, 日野山(佐々治寛之, 1976 福井県自然環境保全基礎調査報告書:174).

滋賀県(重原慶遠, 1937 昆虫界 5(44):715);高島郡(井崎市左衛門, 1939 昆虫界 7(68):597).

三重県伊勢平野(樋田清砂, 1937 昆虫界 5(35):56);藤原岳, 湯の山(後藤光男, 1961 藤原岳の昆虫:49;山下善平ほか, 1963 鈴鹿山脈自然科学調査報告書:251);経が峰(青山三郎, 井上晶次, 1968 ひらくら 12(4):27).

奈良県各地(今立源太郎, 1954 *Amateur Entomology* 5(1/2):10);伯母子岳(山本雅則, 1979 *Sakaiensis* 16(2):142).

和歌山県(後藤伸, 1950 紀州昆虫 2(3):49);和歌山市(岡本四郎, 1938 虫の世界 2(11/12):227).

京都府京都市(木村輝夫, 1936 昆虫世界 40(463):97).

大阪府箕面山(戸沢信義, 1932 箕面山昆虫目録:82;後藤光男, 1965 箕面山の動物相調査:176);高山道(西川芳太郎, 1977 箕面川ダム自然環境の保全と回復に関する調査報告:299);池田(伊賀, 1955);東能勢村青具山, 初谷, 保谷, 吉川峠, 高台寺道(仲田元亮, 1970 能勢の昆虫, 甲虫:35, 1978 同 I:119;1982 同甲虫之部上巻:308).

兵庫県各地(高橋寿郎, 1984 てんとうむし 9:8-9).

鳥取県倉吉市米田，打吹山，東伯郡関金町，
犬狹崎（河本哲至，井上敏明，1978 すかし
ば 10 : 7）。

岡山県北・中・南部（1978，岡山県の昆虫
：129）；真庭郡八束村（桂孝次郎ほか，
1973 蒜山の生物調査：159）。

島根県枕木山（野津 裕，1978 すかしば 9 :
10）；隠岐島（門脇久志，1983 すかしば 20
：7）。

広島県白木山（大沢省三，1965 広島虫報
4 : 92）；灰ヶ峰（保田信紀，小阪敏和，1965
広島虫報 4 : 92）；各地（中村慎吾，1966 比
和科学博物館研究報告 10 : 9）；比和町（中
村慎吾，1977 比和の自然：268）；世羅町屋
ヶ草（小島敏和ほか，1979 広島虫報 18 : 279）。

香川県小豆島（林 匡夫，1956 続・小豆島
の自然：16）；高松市象頭山（佐頭正昭，1975
月刊むし 48 : 31）。

徳島県徳島市名東町，名西郡神領村（三宅
義一ほか，1958 昆虫科学 7 : 32）。

愛媛県松山市（森川国康，矢野俊郎，1941
昆虫界 9(93) : 765）；面河溪（石原 保ほか，
1953 四国昆虫学会々報 Ⅲ : 70）；杉立，岩
屋山，茗山，中山町（矢野俊郎，1961 松山昆
虫同好会時報 16 : 17）。

高知県真如寺山，佐川町，越智山，筆山，
梶が森（矢野俊郎，1961 松山昆虫同好会時
報 16 : 17）；天狗高原（小島圭三，1963 県立
自然公園天狗高原学術調査報告巻：170）。

福岡県鞍手郡宮田町（三宅義一，1957 北九
州の昆虫 4(3) : 14）；英彦山（神谷寛之，
1959 彦山昆虫目録Ⅱ : 26）；障子岳，深倉峽



クロハナムゲリの国々分布図

(松田勝毅, 1963 北九州の昆虫 10:12); 田川地方(高倉康男, 1967 北九州の昆虫 14(1):20); 篠栗, 宮田, 英彦山, 障子岳, 深倉峽, 大牟田, 筑穂, 飯塚, 城山, 香春岳, 福智山, 山田, 勝山, 田川市(高倉康男, 1978 生物福岡 №18:28); 足立山(中尾進治, 1979 北九州の昆虫 26(1):24); 白岩山, 本屋敷, 国見峠, 波畑(山脇好之, 1984 北九州の昆虫 30(3):172).

長崎県対馬有明山(中條道崇, 1961 Mikado 1(1):6; 野村 鎮, 1976 対馬の生物:354); 島原市千本木(今坂正一, 越智輝雄, 1979 北九州の昆虫 26(2):63).

熊本県熊本市本妙寺山, 阿蘇郡湯浦, 久木野村, 人吉市宝来町, 村山, 球磨郡水上村江代(大塚 勲, 1962 北九州の昆虫 9(2):27); 泉村, 二本杉, 熊本市黒髪町(直海俊一郎, 1970, 1971 熊本昆虫同好会報 35:6, 37:13); 熊本市熊本城内(大塚 勲, 1971 前出, 37:19).

宮崎県霧島山(磯崎恵明, 1968 タテハモドキ 3:34; 清水 薫, 1969 霧島山総合調査報告書:264); 児湯郡須木村綾北(中島義人, 1971 タテハモドキ 6:61).

鹿児島県佐多岬(三宅義一, 1956 北九州昆虫趣味の会々誌 7:12); 屋久島小杉谷(小林裕和, 1974 甲虫ニュース 21/22:8; 中根猛彦, 1984 屋久島原生自然環境保全地域調査報告書:609).

先島諸島石垣島オモト岳, パナン岳, カピラ, マエ浜, カツラ山(小林裕和, 1974 前出 21/22:8); おもと岳(石田正明, 1984 神奈川虫報 71:32). 西表島(中條道夫, 1970 Mem. Fac. Edu. Kagawa Univ. 2(192):13; 小林裕和, 1974 前出 21/22:8, 白浜; 石田正明, 1984 前出 71:32).

以上長々と駄文を書いて来たが前にものべた様に普通種と言うことで案外注意もされていない点もあれば反面良くその生態・形態に就いてもわからない点が多くある。斑紋の変化も割合あるようだし、これで区別することは余り意味が無いとも考えられるし、交尾器の変化もあるように見られる。生態的なことがもっと良くわかって来ると、また違った意味での問題点のはっきりしてくるかも知れない。身近の虫でも色々と調べて見たい点が多くあることに気がついた。

(MAR. 1985)